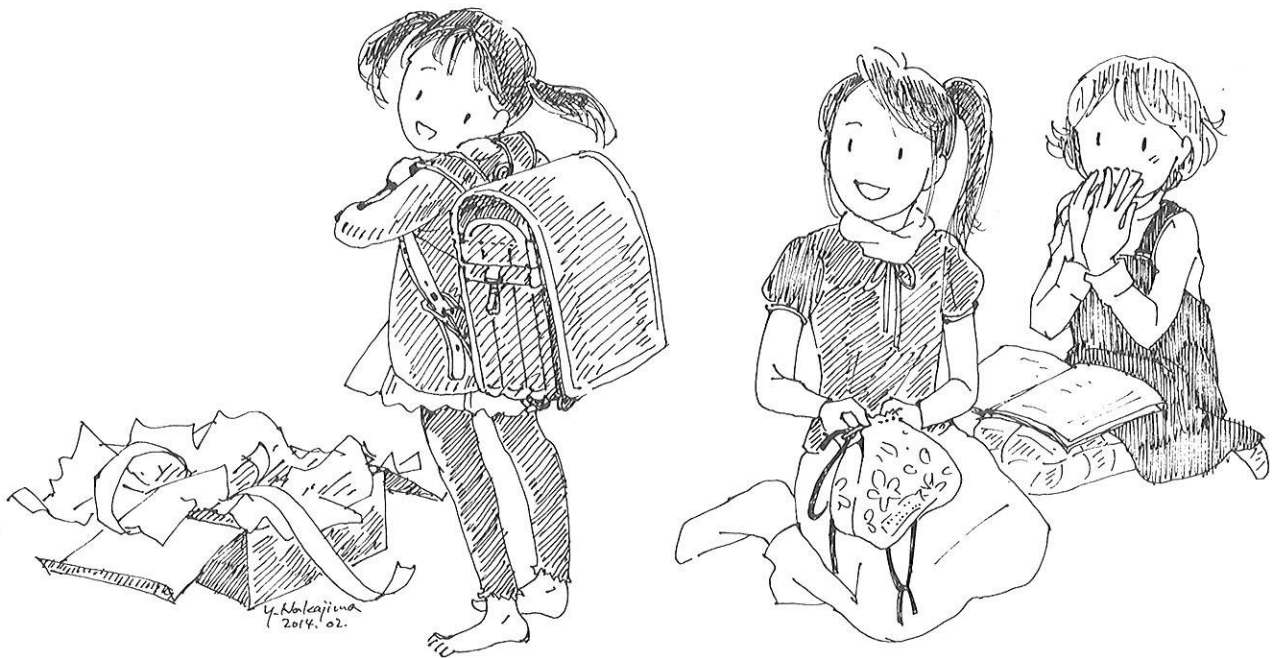


光の子



No.163 2014.4.30

●年間聖句 互いに重荷を担いなさい。(ガラテヤの信徒への手紙 6章 2節)



「真新しいランドセル」

表紙絵・中島由起子

「水温む」

夕星を掲げて猛くるどんどの火

大寒の山一雲も寄せつけず

甕の水きらりと雪のくる気配

寒明くるゆるりと鯉の胴浮いて

引く波の音にぎやかに春に入る

梅咲くと弾みだしたる水のおと

わらんべの声に囲まれ水温む

黛 執

〔春野〕主宰

新年度を迎える

施設長 田中郁夫



新しい年を迎え、当施設は二十九年目の歩みを経過しようとしております。この年度も大勢の方々に、祈りお支えいただきありがとうございますことを思い、感謝申し上げます。

さて、平成二十六年度国家予算案が示され、消費税率引き上げによる増収分(約五兆円)は、全て社会保障の充実・安定化に向けられ、そのうち約六十%(二・九五兆円)が基礎年金国庫負担割合で主な部分を占めています。それ以外の項目では「社会保障の充実」があり、約五千億円が計上され、その中に「社会的養護の充実」として八十億円(国・県で按分負担)が計上されています。その内容は、虐待を受けた子どもなど社会的養護が必要な子どもの増加への対応を図るとともに、地域社会の中でより家庭的な環境で養育・支援することができるよう、グループホーム、小規模グループケア等の実施を推進することとなっています。中身は、①施設における家庭的養育の推進(施設の小規模化・地域化を進めていく)②里親支援等の推進(里親養育を進めていく)③被虐待児等への支援の充実(被虐待児への受入拡大や人材確保対策を進めていく)④要養護児童の自立支援の充実(自立援助ホームの

設置推進や施設退所者支援事業を進めていく)⑤児童養護施設等の防災対策の推進などが盛り込まれています。厚生労働省は、平成二十三年に「社会的養護の課題と将来像」として、施設の小規模化、地域分散化や里親委託の推進など、家庭的養護の推進が検討され、今年度には、「児童養護施設等の家庭的養護への転換」を打ち出しています。これは、各都道府県が小規模化等の推進計画に基づいて計画を策定しなければならず、推進

目標は、①本体施設②グループホーム(分園型小規模グループケア・地域小規模児童養護施設)③里親・ファミリーホームを、各三分の一ずつとし、更に、本体施設の定員を四十五名以下にして、小規模グループでの全ユニット化、地域分散化及び里親等支援を実施することとなっています。当県でもその推進目標に基づいて計画を策定しなければなりません。ここ数年は、増え続ける要養護児童への受け皿対策として、施設数を増やすのではなく、既存のメニューを使い施設受入児童数増員で対応してきた結果、多くの施設が大規模施設になってしまっているのが現状です。各施設でも国の方針に従って策定計画を作成するので、しかし、何よりも地方自治体

が今後どのようなようにして、実現可能な家庭的養護の将来像を描き計画するのかとても心配です。是非、数値目標ありきの制度政策にならぬように、養育指針で示されている「すべての子どもは、適切な養育環境で、安心して自分をゆだねられる養育者によって、一人ひとりの個別的な状況が十分に考慮されながら養育されるべきとし、あたりまえの生活を保障する」観点で策定されることを望みます。

毎年この時期我々は、「児童自立支援計画及び事業計画の総括」を実施しておりますが、その前に、我々職員一人ひとりがまず子どもとのかかわりや自分自身の働きについて自己総括を実施し、「評価する点・足りなかった点・反省すべき点」等を指摘し合い、我々が大切にしている事柄について確認をしています。その中で一人の保育士が、「自分にできることには限られており、食事作り、洗濯、お掃除ぐらい」との記述があり、まさにそのことが子どもたちとの生活づくりの基本「あたりまえの生活」であると考えています。

新しい年度も皆様方の祈りとお支え、ご指導を宜しくお願い申し上げます。

恩送り(序)

仙道 富士郎 老健施設みゆきの丘施設長

前回に続き、またパソコン没入を老人の独り言になってしまふことをお許し願いたい。なお、タイトルに付けた「恩送り」というあまり聞きなれない言葉の種明かしは後ほど。

さて、アップルコンピュータを立ち上げ、痛で亡くなる寸前までスマフォの開発などで話題に事欠かなかったステイブ・ジョブスがスタンフォード大学における卒業式のスピーチで最後に語った言葉は有名である。

「Stay hungry, stay foolish」直訳すると「ハングリーであれ。愚かであれ」となる。「愚かであれ」とはおか

しなことを言う人だと思われかもしれないが、そうではない。小賢しい行いを戒めているのである。主張したいことは「愚かと言われるほどに愚直であれ」という意味で、いまのわが国の青年たちにそっくり差し上げたい言葉のように

も思える。私がこの言葉を取り上げたのはステイブ・ジョブスの数奇な人生を語るためでも、彼の警句の内容についてうんちくを傾けるためでもない。ジョブスもスピーチのなかで話しているが、この言葉は彼の創作ではなく、ある雑誌の最終号の裏表紙に記された言葉である。この雑誌に事寄せて、インターネットが作り上げられていったときの人と人の交わりについて語りたいのである。

雑誌の名前は「The Whole Earth Catalogue」と言い、アメリカでカウンターカルチャーが全盛だったころ、ヒッピー向けに発刊されたものであり、「全地球カタログ」と訳されよう。私たちの世代であれば、「カウンターカルチャー」も「ヒッピー」も十分にお分かり頂けると思うのだが、若い読者には解説が必要のようである。というのは、過日、一緒に被災地の子ども支援プロジェクトをやっている若者たちに「ヒッピー」の話をしたら、困惑顔をされてしまったのである。

カウンターカルチャーというのは、1960年代後半から1970年代前半にわたって世界的に起こった、

既成の事柄に「No」を叫ぶ、若者を中心にした抵抗運動のなかで培われた文化で、アメリカの場合は、性差別反対運動、反ベトナム戦争運動等々多くの社会運動を基盤として生まれた。ヒッピーは、カウンターカルチャーの担い手として、既成概念を否定して自然とともに生きることを理想として、独特な生活形態のもとにコミュニティを作って生活していた。

文化論としてカウンターカルチャーを論ずることはなかなか難儀であるが、一言言えることは、その基本は、世に巣くう邪悪なものに抗する純粋性、自然崇拝の考え方など理想論的な色合いが濃い。前述の「The Whole Earth Catalogue」の編集者はスチュアート・ブランドといい、カウンターカルチャー群像の代表的な論客の一人であるが、「Whole Earth 全地球」という表現は、地球を宇宙のなかに浮かぶ一つの星として捉え、人間を宇宙船地球号の乗組員と見なす考え方に基づいている。

ブランドは、パソコンやインターネットについても立論しており、インターネット勃興期に「TIME」に投稿している。その中で、その論立ては省略するが、「パソコンも

インターネットもすべてカウンターカルチャーのなかで生まれたものである」と指摘している。事実、インターネットの初期の開発に関わった人の中には、カウンターカルチャーの洗礼を受けた人が多い。平たく言えば、インターネットはヒッピーが作ったのである。そして、その事実は前記のスタンフォード大学におけるステイブ・ジョブスのスピーチの一節につながっている。

「私が若い頃『The Whole Earth Catalogue 全地球カタログ』というすごい出版物があって、私と同じ世代ではバイブルのように扱われていました。」

私がしつこく論立てしようとしている理由は、そもそもインターネットは超純粋性を抱いた若者たちによって立ち上げられたものであり、そこには、そうした刻印が押されているのだということ、声高らかに言いたいがためである。どこかの国で蔓延しているように、身を隠して人を攻撃するために作られたものではないのである。

「共育ちカンガルー日記」

(28) 最後の参観日

近藤みちる

3学期が始まって間もなく、幼稚園では保育参観が開かれた。風のない一月の穏やかな日だった。少し早めに園に着いた私は、園庭で参観が始まるのを待つことにした。教室からはピアノの音や子どもたちの元気な歌声が漏れ、やわらかい冬日は園庭の遊具や花壇を優しく包んでいた。お砂場には、誰かが掘った大きな砂のトンネルが残されていた。

誰もいない静かな園庭にこうして立つのは、実に一年ぶりのことだ。一昨年の秋から、週一回の母子通園という形で、この園に通い始めた優希と私。それまで療育施設しか知らなかった私たちにとって、幼稚園の園庭はとて広く感じられた。そしてその広い園庭を、所狭しと元気に遊び回る園児たちの姿にも、私はすっかり気おされていた。

「もーいーかい？」「じゃんけんぽん！」あちこちで元気な声が響いていた。初めて出会ったたくさんのお友達に、瞳をきらきらと輝かせていた優希。(どうかみんなと仲良くなれますように) 祈るような気持ちで、その小さな背中を見つめていた。

を見つめていた。

母子通園では、最初のうちは教室で優希のそばに付きっきりだった私も、母子分離に向けて徐々に優希との距離を取るようになっていった。窓の外から教室の中の様子を見守る時間を少しずつ増やし、やがて完全に優希から離れて職員室で待機するようになった。ちょうど真冬のこと、先生方が私のために、ストーブの前に席を用意してくださった。だが私は、じつと座って待っていることができなかった。とにかく優希のことが気になって、居てもたってもいられずに園庭に出ては、こっそり教室を覗きこんでいた。ちょうどこんなふうな、教室から漏れてくる先生や子どもたちの声にじつと耳を澄ませながら。

クラスメイトたちは、この会話の出来ない風変わりな新人入りさんに、随分と戸惑った様子だった。おせっかいは焼いてみたり、距離を置いてみたり。遊びの輪に入れてもらえないこともあった。敏感な優希が、クラスの中で疎外感を感じないはずはなく、小さな胸を痛めていたことだろう。一時は登

園拒否にも陥った。それでも子どもたちの社会というのは、実に柔軟で弾力性に富んでいて、いつの間にか彼らなりにお互いを受け入れ、ハイタッチやユキ語を駆使して、コミュニケーションをとれるようになっていった。

2学期に入ると、優希の口からお友達の名前がよく聞かれるようになり、幼稚園での出来事を少しずつ話してくれるようになった。「Aちゃん、ころんでないちゃった」「Bちゃんはおねつでおやすみ」「Cくんのおべんどう、ハンバーグ」など、断片でもその時々園の様子がおぼろげに伝わる。よくかけてくれる言葉なのだろう。そんな独り言も口にするようになった。幼稚園のことを話すときの優希はいつも笑顔で、それが何よりも嬉しかった。

そして3学期。驚いたことに、優希はお友達の推薦でグループリーダーに任命された。先生の話では、新リーダーに決まったとき、優希はとて嬉しそうだったそう。家でそれとなく聞いてみると、何とも照れくさそうに微笑みを見せて、そして何も話してくれなかった。そんな優希を見たのは初めてのこと、いつの間にかこんなにお姉さんになっていたので、私は胸がいっぱいになった。

園庭の大きな時計が参観開始の

時刻を告げていた。教室に向かう途中私はふと足を止め、もう一度園庭を見まわしてみた。不思議なことに、一年前にはあんなに広いと思っていた園庭が、今ではとても狭く小さく感じられた。教室に入ると、優希は大勢のママさんたちの中に私の姿を見つけ、嬉しそうに笑顔を見せてくれた。この日の課題は自由画だった。「何を描いてもいい」という自由さは、自閉症の優希にとつて、一番苦手なものはず。大勢のギャラリを前に、きつと大きなプレッシャーを感じているに違いないと思った。だが、優希は張り切って画用紙を配り、嬉々としてリーダーの仕事をごなしていた。そして席に着くと、周りのお友達が絵を描く様子を、長い時間見まわしていた。みな思い思いに、冬休みのひとコマなどを描いていた。そしてようやく自分の画用紙に向かった優希。クレヨンを順番に手にとり、実に楽しそうに、ぐるぐる描きできれいな色を塗りつけていった。優希らしさに溢れた、とても素敵な絵だった。そうだ、それでいいんだと思った。

最後の参観日で出会えたこの宝物のような光景を、私は一生忘れることはないだろう。

雪だるま傾げてゐたり参観日

みちる

マサカンマイネエ

中島 睦雄

先日、同級生のO君からお菓子が送られてきた。「おお、すまないなあ」と思いながら、一口食べてみると、甘くておいしいお菓子であった。

そんな折も折、近所のおばさんがやってきた。ありがたいことに、大根や白菜を持つてきてくれたのである。

私は「どうぞ、どうぞ」と招き入れて、お菓子を食べてもらった。

「友だちが送ってくれた菓子なんです。よ。なかなかうまいです。から、どうぞ食べてください。」

と、お菓子をすすめた。おばさんはお菓子を口に入れると、「ああ、この菓子はマサカンマイネエ。」

「マサカンマイネエ。」

私はこのおばさんの言葉を聞いた瞬間、急に嬉しくなりました。お菓子に対する褒め言葉であると同時に、「マサカンマイネエ」という懐かしい言葉を聞いたから

である。

以前は、私の住んでいるこのあたりでは、誰でも「マサカ：：」という言い方をしたものである。しかし最近では聞かなくなっていた。「マサカンマイネエ」はこのあたりの方言であろうし、今では「マサカ：：」という言い方は「まさかそんな事はないでしょう」というような使い方はあっても、「マサカンマイネエ」とか「マサカタイシタモンダ」などは言わなくなっているように思う。「マサカ」は「非常に」とか「とても」とかいう意味を込めてそういったのであった。

私はお菓子を送ってくれたO君に「近所のおばさんに、あのお菓子を食べてもらったら「マサカンマイネエ」と言われました。これは我々の近くの方言で、英訳してみるとVERY DELICIOUSとなります。」とお礼の手紙を書いた。すると、O君から「あの手紙はおもしろかったね。」と返事がきた。まさに「マサカンマイネエ」は「非常においしいね」なのである。小学校時代の同級生K君が来た。特別な用事はないのだが、近くへ来たから寄ってみたんだと言う。その時、例の「マサカンマイネエ」の話をしてきた。

「ああ、そんなの普通にしゃべっていたよなあ、昔は。」

とK君。

「最近はこの辺でも、あんまり聞かない言葉になっちゃったよ。だからこの間、昔の言葉に出会って嬉しくなっちゃったんだ。」

「そう言うと、そうだよなあ、テレビなどの影響なんかもあるし、昔ながらの方言が、消えていつちやうんだよなあ。共通語は必要だし、わかり合えるんだけど、なんだか田舎のぬくもりのある言葉が消えてっちゃうみたいだよなあ。」

「そう言えば、おれは満州から引き揚げて来たんだよなあ。」

思い出したようにK君は語りだす。K君は、大東亜戦争の敗戦によって、満州(現在の中国東北部)から、命からがら日本へ、父母のふる里へ帰って来たのである。小学校の4年生の時、我々のクラスに入ったのであるが、敗戦直後のゴタゴタで、3年生の時はずいぶん間隔があったという。空白の一年間だった訳である。しかし、頭の良いK君だから、教室では全くそのような空白を感じさせなかった。

苦しい時間を経て、日本の土地を踏むことになったのだが、そのK君が、我々のクラスに入って最初に驚いたことは、言葉のわから

ない部分がたくさんあったということだった。

満州時代は、日本の各地から集まった人たちの社会だから、共通語でなければ話が通じない。子どもたちも、満州での生活では共通語で暮らしていたのだから、日本での方言の世界に入っては、わからない部分が多かったのも、あたりまえのことである。

「：：してクラッセエ」だとか「シマレエ」だとか「：：のテエ」もつとわからなかったのは「チクラッペ」。

「シテクラッセエ」は「してください」で、「シマレエ」は「下新井」という地名である。「テエ」というのは「：：の人たち」、または人のことである。「東京の人は」は「東京のテエ」と表現していたのであった。「チクラッペ」は「うそ」の事である。

「あん時は、本当に困っちゃったよなあ。」

と、つくづく言葉の違いに戸惑ったそうである。しかしすぐに慣れてしまつて、むしろ愛着を持つようになつていたと言う。そんな訳で、失われつつあるこの土地の方言について、残念そうであった。ぬくもりのあるあの言葉「マサカンマイネエ」くらい、残しておいても良いのかなあ。

プルームズ

原田家日記

原田家の「長男」である高校生の仲二は、頼りになる男だ。「ゲームやる前に宿題やれよ」「ちゃんと片付けろ」「話さけ」などなど、大人よりしつかりと小中学生を注意する。自分が小学生だった頃のことはいくつも忘れて……。力仕事も進んでやってくれる。他の家のこと、はたまた職員の仕事のことも快く引き受けてくれる。ああ、何て頼りになる男だ。

そんな仲二もお隣り佐藤家の彩花には弱い。光の子どもの家に来て、やっとな年が過ぎたらしいの小さな女の子だ。

まるで娘に会うために職場から飛ぶように戻ってきたパパのように、学校から帰るとすぐに、お隣りへ遊びに行くのだ。彩花も仲二を慕っており、仲二も彩花をかわいがっている。仲二にとって、とても大切な関係なのであろう。

誰かが意図した訳ではなく、人との繋がりは不思議だなあと改めて思う。そして、大切な関係を経験できている仲二は豊かだなあと、

あたたかい気持ちになる。

池田 祐子

光の中で 佐藤家

早いもので一年が経とうとしています。佐藤家では中学3年生の丘実が無事に高等学校への進学が決まり、ホッとしたものです。夏休みの頃はどのようなかと不安でしたが、塾に行くようになってからは、彼女自身なりの頑張りを見せてくれました。

また、梨乃ちゃんが光の子どもの家で初となる3年保育に通園します。梨乃ちゃんが来てから約一年半が経ちました。その間、たくさんの人達の関わりもあり、身も心も大きくなりました。4月から幼稚園生活も平穩無事に過ごしてくれることが期待できます。

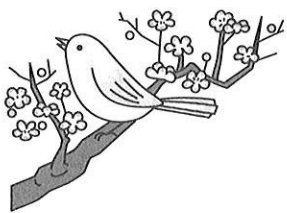
そして、幼稚園生から小学1年生になる和人くん。幼稚園の時から「ひらがな」「さんすう」を頑張る姿を見ていると、小学生になることを楽しみにしているんだな

あと伝わってきます。他の子どもたちもそれぞれ進級します。それぞれのステージで頑張る子どもたちが笑顔で帰ってくる家でありたいと思う、そんな春先のことでした。

新吉屋 健太

子どもたちの季節 仙道家

先日、6年生にとって最後の長縄大会がありました。会場には昨年よりもたくさんのお客さんがいました。その中で和んだ雰囲気の小中学生たち。ですが、練習になると急に表情も引き締まり、誰もが真剣に取り組んでいました。本番では5、6年のチームは一度目の挑戦では引かかかってしまいました。ですが、二度目は持ち直し、見事ノーマスで飛び続けたのです。二度目のチャレンジの前に先生からの言葉がけがありました。その時、先生は何と言葉をかけたのでしょうか。二度目に臨む子どもたちの表情には自分たちを信じ、立ち向かうという意気込みが強く感じられました。一方見守る私たちは、緊



田口 貴子

張でいっぱいでした。それだけに、飛び続けていた時や号泣して喜び合う姿に、心から感動しました。結果は見事、上位を独占！

取り組んできた日々が様々な意味を持って彼らの力になったんだと本当に感動しました。練習も指導も辛いものがありました。その中で、失敗から持ち直す力をつける事、子どもたちが力を発揮できるように指導した先生の、信じる力、指導力、本当にすごい。

人を困らせることは簡単ですが、感動させることは容易にできる事ではありません。何かに懸命に取り組む自分に自信を持ち続けてほしいです。

河のほとりて 倉澤家

食事は、私と子どもたちを結ぶ重要なものとなっています。

意中の人を射止めたいなら、その人の胃袋をつかみなさいという話を聞きますが、私も子どもたちの胃袋をつかみたいと頑張っています。

朝食はパン派とごはん派に分かれるため、おかずを2種類用意することもあります。いつもイメーজしているのはペンションの朝食。そこまでオシャレではありませんが、盛り付けには心を遣っています。

昼食は、小中学生は給食ですが、高校生は弁当です。高校生になったら弁当は自分で……。とも思ったのですが、私の「作ってあげたい」という気持ちが強く、今も作り続けています。

先日、高校生の彩奈が「今日の卵焼きめっちゃおいしかった！」と言ってくれました。卵焼きはほぼ毎日入れているのですが、その日の砂糖と塩のバランスが彩奈の好みだったようです。彩奈は「弁当楽しみなんだよね」とも言ってくれます。そんなおだて(?)にうまく乗せられて、ますますや

る気を出している私です。

夕食は朝から仕込むこともあり、やはり一番力が入ります。食卓についた子どもに「今日、これ食べべたかったんだよね。どうして分かったの?」と言われたり、「これ超おいしい!」と言われると、単純な私はまた明日も頑張ろうと思えます。

ただひとつ残念なのは、女子の多い倉澤家なのですが、おいしい止まりで、これどうやって作るの?と聞いてくれる子がいないことです。

倉澤 智子

子どもたちの季節 竹花家

4月から双子の早川姉弟は晴れて高校生です。そんな2人の「受験生活」は対照的でした。

亜弥は、中2の春休みから「塾に行きたい」と塾に通い始め、部活を引退してからは高校の文化祭や学校説明会に何度も行き、秋には志望校をいくつか決めていました。「まきさん、今度説明会があるから一緒に行ってね。」と私を誘い志望校へ行ったたり、「すべり止めの私立は受けるけど、行かない

から。うちは公立に行くんだから」と、志望校合格を目指し入試直前は塾の授業を増やしたり。不安を表現しながらも、マイペースに、ぶれることなく受験生活を送っていました。

一方、なかなか志望校を決められず、「どうせ高校なんか行ってもさあ」と前向きになれなかった拓也。「塾行っても勉強しないからもうつたいないよ」と塾にも行かず、「行ける高校でいい。つて、行ける高校あるかな。」「苦笑」と何度つぶやいていたでしょう。それでも、「大丈夫、何とかなる!」「とりあえず、説明会行くよ!」と私に言われ、初めて高校説明会に行ったのは12月。「ここ、制服いいね」「文理系と商業コースがあるんだ、設備もキレイだね」となかなか気に入ったようで、ギリギリで志望校を決定しました。

入試当日、試験を終え「落ちたかも。いや、落ちたと思う。ごめんね、うち私立かも」と一気に自信をなくし、「合否発表、一人で見に行くから」とかなりナーバスになっていた亜弥。「受かったと思うよ」だつて、結構、試験できたんだよ!ホントだよ!」とこちらが不安になるほど余裕な笑顔を見せる拓也。最後まで対照的な2人

の姿に「まあ、何とかなるよ」と声掛け。結果は2人とも見事合格!「新しいお弁当箱買おうね!」「リュックと靴はどれがいいかな?」と、これから始まる高校生活を楽しみにしている2人は何だかキラキラして見えます。「いいなあ!高校生!あの頃に戻りたい!」……最近の私の口癖です。

牧野 由紀子



養育論の試み その16

年度末

菅原 哲男

光の子どもの家は、創設以来、中学卒業生全員の高校入学を果たしてきた。

この季節はこの頃の児童養護施設では悩ましいときである。

毎年10%以上もふくれあがる虐待通告・相談件数は先刻ご承知の通りである。児童虐待はかなり悩ましい事案である。

通告を受ければ所轄の児童相談所は安否確認を概ね48時間以内に行わなければならない。その結果乱闘騒ぎまで起こしても、当該の子どもをその虐待現場である家庭・家族から分離しなければならぬ。それに、ほとんど通告された家族は虐待を頑なに否定する。だから児童相談所は、虐待を否定する親から、悪態を吐かれ、怒鳴られながら生木を引き裂くように子どもを引き離して保護するのである。まるで悪徳な子どもさらいのように、と心ある福祉司は、暗い顔でつぶやいた。

その虐待が確認されると、当然子どもは、家族とは一緒に暮らすことは許されない。勢い係争事案

となる率はうなぎ上りである。

昨年度の虐待通告・相談は6万7千件である。対する社会的養護の全国定員は4万人を下回る。虐待発生件数の相当数は養護系の施設に収容されることになるから、どうしても重度の子どもたちが児童養護施設などに集まり、子どもたちが負っている難度が上がるのである。

児童養護施設の定員と発生件数との間に大きなギャップがあり、早々に改められそうもない。

(公財)東京都人権啓発センター発行の機関誌「OKKO人権」の号に、不登校新聞編集長石井志昂さんが、「学校に行くか、死ぬか」という社会を変えたい、というタイトルで寄稿していた。

このタイトルは、児童養護施設の子どもたちの社会的位置と重なるのである。

この十数年、虐待以外での利用者のない光の子どもの家では、中学生3年生の一年間は、「学校に行くか、死ぬか」という知覚できないが、じわり確実に来る圧力を

受け続けるのだ。児童養護施設の子どもに限らないだろうが、人間関係が希薄になり続けているこの社会で暮らす最も弱いはずの子どもたちは、刺激や圧力にきわめて弱いのだ。だから全力で拒否を表現し、怒り続けるのだ。

また、気が利かないか、利き過ぎたりする子どもが虐待のターゲットになりやすい。子どもや親に障害や病などがあればその発生率は級数倍に跳ね上がるのだ。障害児施設の70%程度が児童年齢の超過者たちによって占められているという。(厚労省HP)

このことから、ボーダーライン以下の子どもたちが児童養護施設に集まりやすいのである。

光の子どもの家では子どもたちのセルフイメージをどうやって上げようかと腐心している。セルフイメージのあがった子どもたちは、特別支援学校や学級の利用に積極的になれない。

指導員たちが手を変え品を変えて学習指導に励み、どんなに背伸びして手を伸ばしても、普通高校に届きそうもない子どもが毎年いる。そのような子どもは、特別支援学校の高等部にやっと入れる。

どこの高校にも入れなかった子どもには、児童養護施設で暮らすプログラムがないのである。義務

現場から

光の子らしく

岩崎まり子

3月半ばくらい陽気になったかと思えば雪が降ったり…。体調管理が難しい季節ですが、皆様お元気ですか。

皆様のところにお便りが届く頃には、結果が出ているのかなと思います。今まさに丘実ちゃんも受験生真っ只中で、結構大変です。

先日も願書記入の際に訂正があった、それを伝えると、

「先生が言ったの!」
「そうかもしれないけど、さつき先生に書き直すようになって言われたんだよ。」
「どうせ練習だし!」

「練習じゃないから書き直さなきゃいけないって言ってたよ。」
「違うの!練習なの!だから判子も押さなきゃいけないの!」
「だから、書き直してからじゃないと!」

「もう!こんな願書クソだし!高校なんて行かぬえし!」

: : : 普段からアクセル全開という感じの丘実ちゃんなのに、そこへ受験というプレッシャーが重なるのですから、それはもう大変なわけです。普通に聞いていけば、「あ、そうか」とわかる内容でも、すぐパニックのように喚き散らし、泣いてしまったりするのです。一方で、

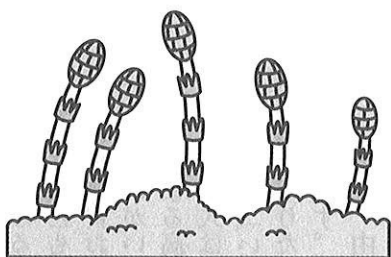
「丘実、絶対受かるから。高校行ったらアルバイトするからお金もすぐ貯まるし: : :。」

などとウキウキしゃべり続けるのですから、不安定の上なのです。不安だから放り出した「逃げたい」「避けたい」「そう願ってしまうのは、何も特別弱い人だから」ということではないでしょう。

それでもそこから、不安だけどころから、「不安だから練習する」いろいろな葛藤を経て、自分で認められるくらいの真つ当なところ(ギリギリのラインだったとしても)に落ち着くのが大方の人なのではないかと思えます。

見たくないものを見ず、知りたくないことを突っぱね、受け入れたくない事柄はなかったことにしてしまおう。そんな丘実ちゃんは、自分の中の不安を直視することすらできないのだらうと思います。そして、そんな彼女と何年もの時を過ごしてきた私は、彼女の横暴とも思える言動に、

「あー、頭に来る!」
と言いつつも、心の根っここのところには届いていない私の働きを顧みないわけにはいかないのです。こうすれば百パーセント大丈夫なものなど無い私たちの「仕事」。そもそもどんな人間が、どんな生



教育終了までの子どもを対象にして設けられた児童養護施設の出自がもたらす限界が露出するのである。特別支援学校などに行った子どもたちにも、18歳はやってくる。18歳で、教育も福祉も打ち止めの状態が長く続いている。

その後は社会的自立か他種の福祉施設利用か: : :。そして、不登校新聞の石井さんに言えば、死ぬか!なのである。

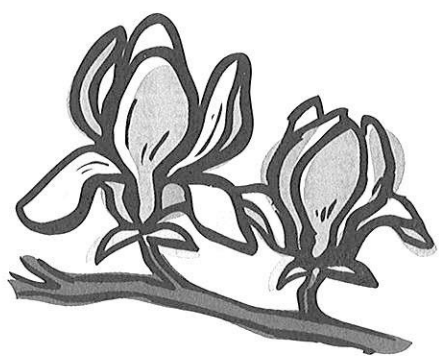
何しろ、児童養護施設を利用するに至った家族や親族の支援など、かなりのエネルギーを家族支援に費やしたとしても皆無に近い状態である状況は変わらないのであるから。これが36名定員の光の子どもの家の実情である。

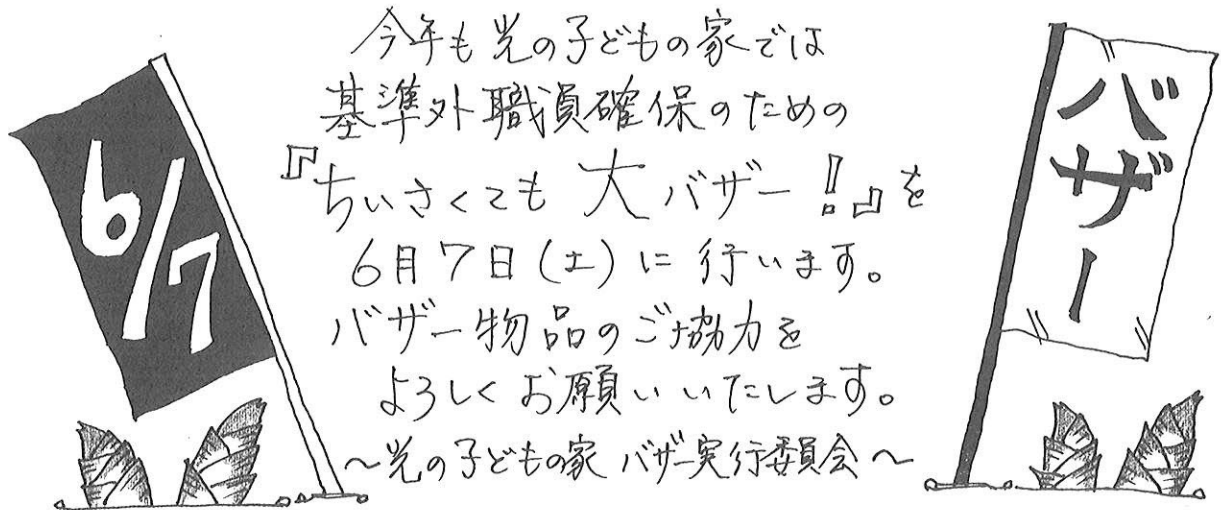
光の子どもの家では、今年4人の中卒者がそれぞれ公立高校に合格した。学校に行くか、死ぬか、という圧力を乗り越えて!

き方が一番いいなどと他人が測ってよいのか: : : 考えれば考えるほど、深い淵に入り込んでしまうような日常です。本当に私自身が大きな不安を抱えながら居るんだと改めて思わされます。

直視した不安が、あまりにも大きくなって真つ暗で引きずり込まれそうなくらいだったら、見ないでやり過ぐすというのも一つなのかも知れませんが。引きずり込まれそうなき「助けて」と手を伸ばしたとき、誰かの手に触れたら、そこからまた、生き始められるのかも知れません。その時のその「手」に私たちは、私にはなれるのだろうか: : :

2階の窓から見える木蓮の芽は、もう随分大きくふくらんでいます。





日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 =

2013年11月~12月

2013年11月現在

幼児4名 小学生15名 中学生9名 高校生8名 36名

- 4日 第29回感謝の集い 例年より多くの方々にお集まりいただき日頃のご支援への感謝を伝える 終了直後の大雨の中子どもたちも一緒にすぶぬれになりながらの片付け 第102回理事会
- 9日 聖学院大学の学生によるワーク
- 17日 株式会社ネクストステージより3名来訪見学 今後社会貢献活動として継続的にご支援して下さるとのこと 感謝
- 29日 杉本英夫様による夕礼拝奉仕 感謝
- 30日 幼稚園表現発表会 元職員も駆けつけて子どもたちの頑張りを喜んだ
- 12月
- 1日 第1アドベント礼拝・祝会
- 7日 ハンドベルグループのグロッケンシュピールによるコンサートへ招待 美しい音色に子どもたちも職員も感動 感謝
- 8日 第2アドベント礼拝・祝会
- 9・20日 それぞれの小学校との定期連絡会 短い3学期に向けて子どもたちの今後の課題を共有する貴重な機会

お忙しい中で時間を作ってくださる先生方に心より感謝

- 15日 第3アドベント礼拝・祝会
- 21日 里親研修会
- 22日 第4アドベント礼拝・祝会
- 24日 キャンドルサービス ロウソクの灯る部屋に全員が集まってお互いにメッセージを送り合う非日常の時間 夜にはこっそりとサンタクローズ来訪
- 25日 ページェント礼拝・クリスマス祝会 イエスキリストの降誕劇を礼拝として行う 多数の方々にご覧いただきクリスマスのお祝いの時を持った 感謝
- 28日 お餅つき 全員で90kgのもち米を臼と杵で搗く 力自慢の高校生も活躍 負けじと職員も頑張る 食べることを頑張る子どもと職員も多数

<11・12月の物品寄贈者各位>

- 小池みどり 杉山和俊 伊村幸子 宮本美和 斉藤康光 塚本藤田陽子 木村郁子 一瀬多恵子 中村知子 石川俊浩 山田一子 中村久美子 浜田文昭 小山田貴子 川口雅資 樋口まち子 岡村真千子 松本明子 松野節子 藤沼畜産 大橋清栄 椿晋 椿幸子 大倉陽子 三国コカ・コーラボトリング 富田農園 奥田のり子 埼玉東部ヤクルト販売株式会社 株式会社プレナス ほか多数
 ☆たくさんのお支えの中で歩みを進められますことを感謝いたします (洋)

////// ———— 反 射 光 ———— ////

大雪の降った冬を越えて暖かな春となり、新しい年度を迎えました。多くのお支えの中で一人の子どもが高校を卒業し、就職という形で光の子どもの家から自立しました。3月の就職間近に行った「出発(タビダチ)の会」にはお世話になった方々がたくさん来てくださり、励ましの言葉をかけて頂きました▼大変な過去を背負いながら光の子どもの家に来て、大切な時期をここで暮らして社会へと出発つ子どもたちです。不安や孤独を自身で受けとめられるようになるには長い年月が必要です。18歳での措置解除後も、後ろ盾となる存在が必要なのです。そのような存在になれるようにと今の関わりも卒園後の関わりも続けております▼3月に自立した彼女が先日事務手続等都合でこちらに立ち寄った時、一人暮らしの様子についてたくさん話してくれました。近所の安いスーパーが歩いてすぐの所にあるとか、タラコのバックを買うと4切れ入ってるからお得だとか、ちゃんと生活しているんだなあと少し安心しました▼出発の会の前日に彼女から「本当に本当に生まれてきてよかったです」というメールが届きました。彼女の輝きとたくましさに感動させられました。今年度もどうぞよろしくお願いたします。(洋二)